

[第26回 常民文化研究講座]

創立100周年記念事業 日本常民文化研究所の100年  
**物質文化にみる遠い過去／近い過去**  
——民具研究と考古学——

日程 2022年12月3日(土) 13:00~17:30

会場 神奈川大学みなとみらいキャンパス5階5007講堂(オンライン併用)

「物質文化にみる遠い過去／近い過去  
——民具研究と考古学——」の開催

角南 聡一郎

第26回常民文化研究講座は、「物質文化にみる遠い過去／近い過去——民具研究と考古学——」のテーマで、2022年12月3日(土)13:00~17:30に神奈川大学みなとみらいキャンパス5階5007講堂において開催された。今回の講座は2019年以來の、対面主体(オンライン併用)による開催である。当日のプログラムは次のようなものであった。

趣旨説明 角南聡一郎(神奈川大学日本常民文化研究所)

基調講演 櫻井準也(尚美学園大学)「考古学からみた民具研究」

報告1 野林厚志(国立民族学博物館)「アチック資料と鹿野忠雄」

報告2 角南聡一郎(神奈川大学日本常民文化研究所)「新しい時代のモノと民具研究」

報告3 太田原潤(神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究所)「民具の実測図、考古資料の実測図」



写真1 会場風景

報告4 小島摩文 (鹿児島純心女子大学) 「大学教育における民具研究と考古学」

報告5 岩井顕彦 (たつの市教育委員会文化財課) 「埋蔵文化財と有形民俗文化財のはざままで——自治体における実践から——」

総合討論

当日、全体の司会進行は安室知所長が務めた。開催の趣旨の要点は、以下の通りである。

現代社会ではデジタル化が進行する一方で、アナログな物質文化(モノ)にも注目が集まっている。人類史を語る上で物質文化は不可欠な要素であるといえる。このような中で、アチック・ミュージアムによる民具や考古遺物の収集は大きな意味を持つ。本講座では、物質文化によってわれわれの、遠い過去と近い過去の諸相に迫ろうとするものである。アチックが注目した、近い過去のモノたちは民具と称され、ミンゾク学の対象と

なった。一方、遠い過去の品々は考古学の対象となり、考古遺物と呼ばれるようになった。しかし近年は、過去に収集された民具を語れる人々はおらず、いわば遺物化している。考古学では、より新しい時代の資料を対象とする、近現代考古学が誕生した。両者は物質文化という大きな概念の中に包括することができる。普段はそれぞれの学問の中で調査研究されているモノを、巨視的に論じることにより、文化資源としての活用の展望や、日本常民文化研究所が、これからどのような資料を調べ考えるかが見えてくるものと期待する。本講座は、民俗学者と考古学者が向き合い、この問題を共に考え語る場である。

当日は対面23人、オンライン97人の参加者(一般)があった。主に民具と考古学に関心のある方々が参加されたと思われる。会場には若い世代の顔も多数見えた。総合討論では、まず、民具研究と考古学の関係について、渋沢敬三が考古学をどのような捉え、考古学者とどのような関係にあったかについて話し合われた。続いて、登壇者それぞれ櫻井準也氏の基調講演を受けて、自身の報告の補足も含めて、民具と考古資料との関わりについて語った。続いて、民具研究と考古学の未来を考えるという意味で、大学も含めた学校教育における取り扱われ方や、行政における文化財としての保存・活用について議論がなされた。



写真2 総合討論



写真3 登壇者との記念写真